

タイトル:平成 25(2013)年度 教育セミナー

日時:平成 25 年 9 月 20 日(金)～23 日(月・祝)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「イスラーム建築」の創出—『イスラーム建築の世界史』から

深見 奈緒子 (早稲田大学イスラーム地域研究機構)

今夏、7 月末に『イスラーム建築の世界史』(岩波セミナーブックス)を出版した。この本は「イスラーム建築」に注目してその歴史を辿るという趣旨で2008年に開催した岩波セミナーをまとめたものである。4 回のセミナーで扱えたのは、ムハンマドが生まれる以前の 6 世紀から、オスマン朝、サファヴィー朝、ムガル朝の建築が爛熟・繚乱期を迎える18世紀半ばまでであった。

その後、出版に際して、現代までの通史を描こうとする中で、「イスラーム建築」という括り自体が、19 世紀半ばイギリス人建築史家ファーガソンが提唱した世界建築史におけるサラセン建築に由来すること、その発端はピクチャレスク・廃墟趣味・異国趣味の流行の中、18世紀半ば以来ヨーロッパに建設された庭園の亭としてのモスクにあることが明らかとなった。当時スペインからインドにいたるムスリムの建築がまとめてムーア、モレスク、サラセンなどと呼ばれるようになり、西洋で実際に建築をたてる建築家たちがそれらをミックスし、その歴史的位置づけを行ったのがファーガソンであった。

本セミナーではその件を説明したのだが、発表後の意見交換は、私にとって非常に有益な場となった。中国の道教の観や儒教の廟のような清真寺はイスラーム建築ではないのかという質問を受け、私はしどろもどろになってしまった。ディズニー・シーのアラビアン・コーストはいわゆる「イスラーム風」だけど決してイスラーム建築ではない。中国風の清真寺は「イスラーム風」ではないけれど、ムスリムが使う礼拝所(モスク)である。建築文化を「イスラーム」でくることの意義は何なのだろうか。イスラーム建築史を研究してきた私にとって、「イスラーム」という括りで広い地域と長い時代を対象としたことによって、1. 普遍性と多様性を認識できた点、2. 周囲のイスラーム以外の文化と比較して考えることの重要性が喚起された点、3. 「イスラーム」という括りから脱却しなければいけないと考え始めた点があげられる。

討論の中で、様式で考えることの必要性が説かれた。18世紀後半から西欧で発展史観にもとづいた様式史が構築された。彼らの様式史は西欧だけを対象とした点から再考が必要で、賛同できない点も多い。けれども、当時の今を肯定するために、建築作品から脱却し、世界観や精神史も含めて壮大なフィクションを構築したという点では目を見張るものがある。イスラーム建築では、オスマン朝建築のように地域や時代を王朝と結びつけて説かれることが一般的で、王朝ごとの建築史が説かれる。これは日本建築史も含め、西洋以外の建築史に共通する事象である。すなわち、19世紀に西欧が他者として括った文化では、フィクションとしての様式史の構築がなされなかった。

その第一歩として、イスラームの広がりに対して、地域と時代を横断する、わかりやすく、魅力的な様式論を構築したい。中東に生まれアフロユーラシアに広まったイスラームの建築文化を中心に、異なる宗教の建築文化も巻き込みながら、時代の潮流を語る様式史が描きたい。これにはまだまだ時間がかかるけれど、本セミナーによって重要な観点を指摘していただいた。